

Fang of No Face ~
Sword Art • Online
alternative ~

Mr. bot—8M6N

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「死ねッベータテスターがッ！」

集団の中の一人の男が罵倒を浴びせ、手に持つ武器を振り下ろし、彼女のHP^命は0となった。

彼女は、彼女を構成するポリゴンを爆散させ、空へと溶けていく。

その後、男たちはまるで鬼の首を取ったように意気揚々と姿を消していった。

そこに残ったのは、彼女が振るっていた直剣と――

「……………あ、ああ……………あ……………」

――彼女の弟だけだった。

本作品は電撃文庫から発刊されている 川原礫著「ソードアート・オンライン」シリーズの二次創作作品となります。

書籍化からコミカライズ化、アニメ化、ゲーム化といった様々なメディアミックスもされており、原作の書籍は今も連載中である為、できるだけ原作に忠実になるように努めておりますが、少なくとも私による設定の捏造があります。

そのあたりの御理解の程よろしくお願いします。

……ちよ、著作権的なアレでアウトになったりしないだろうか（ガクブル）

【重要】

本作品は作者の都合と気分により2つのエピソードを同時並行的に作っております。

一応、最新話には、小タイトルの末尾に（NEW!!）を入れるという対応をしております。

読者の皆様には不便をおかけしますが、その事をご理解の上お読みください。

目次

Prologue

この死と隣り合わせの世界で――

1

2022年12月26日 あの時森で出

会った背中近く……遠い……①

EP | elf ① Favor of

mouse 4

EP | elf ② 森に響くは――

12

EP | elf ③ この間、僅か1分

(笑・仮) 24

EP | elf ④ IRRREGULAR

!?!? 36

EP | elf ⑤ たった一月前の日々

は遙か遠い過去の彼方 (NEW!!)

45

2024年3月13日 顔無しの髑髏は

今日も今日とて――

EP | elf ① ソロプレイヤーナナシ

さん (仮) 59

EP | elf ② ANOTHER RE

D (仮) 65

EP | elf ③ 《無貌 (No Fac

e) 74

EP | elf ④ 本日の迷宮区。モンス

ター時々地震。つまり平和だ（錯乱）

Prologue

この死と隣り合わせの世界で――

+++++

196条 もし人がアウイルムの子の目を潰しときは彼の目を潰す

197条 もし人の骨を折ったときは彼の骨を折る

くハンムラビ法典 196条197条よりく

+++++

「クソツ……なんなんだよ……なんなんだよッお前らはあッ!!」

1つの集団の中の男が声を荒げる。彼らは、もう1つの……異様な集団に取り囲まれていた。

全員が黒の衣装に黒のフードドロップで身を包んだ集団。

「この《顔無し》共があッ!!」

そして、全員が何も描かれていない白の仮面で顔を隠した異様極まる集団だ。

「こんな事、しても良いと思ってるのかッ!」

その集団は何も喋らない。一人の男が罵声も浴びせるも、ただ無言で集団で取り囲んでいた。

「『こんな事をしても良いのか?』だと?……それはコチラのセリフだ。散々犯罪行為を働き、散々何の罪の無い人を殺して奪ってきた連中が……何を今更……」

黒の集団の中から、若干の呆れが混じった落ち着いた声が響いた。

その男は、異様な集団と同じ黒に身を包んだ一人だったが、白の仮面を被っておらず、目深に被ったフードの影から紅の光を二つ灯らせている。

「……馬鹿馬鹿しい。そんな事をしていて許されるとでも思っていたのか?」

フードの男は、腰の両側に一本づつ吊り下げた刀身の短い黒の直剣を引き抜く。

「全員、武器の使用を許可する。……ゴミクス共は皆殺しだ。」

彼の名は誰も……仲間たちでさえ知らない。ただ、噂が噂を呼びこよう呼ばれるようになる『PKKギルド《無貌の牙》の頭目 Mr. O 無貌^{No Face}』と。

+++++

ここはVRMMO《ソードアート・オンライン》。通称《SAO》。世界初のVRMMORPGにして、アバターの死が現実の死に直結するデスゲーム。

彼らは、このゲームのプレイヤー。あるいは、このゲームに魅せられ、人生を狂わされた囚人。

約一万人の彼らは、約2年間……731日という膨大な時間を囚われの身で過ごし、その中の約4000人という数の人間が命を落としていった。

SAO製作者茅場晶彦によって引き起こされたこの忌まわしい事件は《SAO事件》と呼ばれるようになる。

この世界で彼らは、死の恐怖と一緒に思い思いの人生を過ごすこととなる。ある者は安全の保障された《圏内》に引き籠もりある者は安全を優先しつつも生活のために《狩り》に出かけ、ある者は大規模な組織に所属しその恩恵を享受し、ある者はデスゲームクリアを目指し最前線に身を置き……ある者はこの狂気の世界で犯罪に手を染めていき……そして、ある者はそんな犯罪者に復讐を誓い人殺しへと狂い変貌していく。

+++++

2022年12月26日 あの森で出会った背中近く

……遠い……①

EP—elf① Favor of mouse

無限と夢幻の蒼穹に漂う空中の城《アインクラッド》。ここは世界初の仮想現実によるRPGの世界にして、アバターの死が現実での死に直結するデスゲームだ。

約一万という数の人が囚われてから二月が過ぎた頃。そして、全100層からなる城の攻略の最前線は第四層に入り、とあるビーターと赤頭巾のコンビがアインクラッド攻略に奮闘している頃。

その一つ下の階層で一組の男女が揉めているところから始まる。

これは、彼が彼女と”出会い””別れ”、先人に何かを教わるまでの話だ。

——触覚が赤い。

研ぎ澄まされた神経が未だ落ち着くことなく全ての感覚を伝えてくる。

――嗅覚が赤い。

鼻を突くような鉄錆の匂いがする。

――聴覚が赤い。

命乞い、悲鳴……色んな胸糞が悪くなる物を聞いた。

――味覚が赤い。

男の喉元を食いちぎったせいだろうか？

――視界が赤い。

ふと見た手は紅く染まっていた。

――

いつからだっただろうか。俺は「寝る」事が出来なくなった。

「胸糞の悪い夢を見た」

例え眠ることが出来ても、ほんの短い間だけで直ぐに目がさめる。

「寝る」ことが出来ない。それ自体おかしな話だ。何故なら、今俺が囚われているVR MMORPG《ソードアート・オンライン》は世界初の《フルダイブ仮想現実》技術を用いたMMORPGにして、ログアウトが不可能になり、ゲームでの死と現実での死が直結したクソゲーだ。

今頃、本当の……ポリゴンの集合体ではない、血と肉と骨で出来た現実の身体は、二ヶ月もの間スヤスヤと病院のベッドの上で眠り続けているからだ。……まあ、それを言っ
てしまえば、「食事」もこの世界では必要の無い行為だろう。

だが、実際にはそうはいかない。この《ソードアート・オンライン》の開発者にして、この命懸けのデスゲームを俺を含めた総勢約一万人のプレイヤーに敷いた男「茅場晶彦」は随分と凝り性だったようだ。

食事をしなければ「空腹感」があり、睡眠をしなければ「疲労感」を抱く。これらは全て、《ナーブギア》という仮想世界と現実世界を繋ぐヘルメット型の機器から発せられる電気信号による仮初めの「空腹感」や「疲労感」だ。

話が脱線しているようだ。ここで閑話休題といこう。

この仮想世界で眠れない。たとえ寝る事が出来ても、その眠りは浅く、直ぐに起きてしまう。勿論、「疲労感」はある。それも酷く重度の「疲労感」だ。意識していなければ、重い脛が落ちてしまいそうな程だ。だと言うのに、俺の神経は常に極限まで研ぎ澄まされ、寝ることを俺はこの身体アバターに許さない。……いや、許せないだろうか？

俺は一体いつからこうだったのだろう。この仮想世界がデスゲームとなり、死がともも近くに感じられるようになってからだろうか？ポリゴンの集合体とは言え、初めてモンスター……生き物を殺した時だっただろうか？……それとも、”姉の死”を夢で何度

も見るようになってからだろうか？ 姉が殺された事への復讐心に従って、何日もの間自身レベルを上げ続けた時からだったか？……………それとも、姉の仇の一人を殺したその日からだっただろうか？

……………分からない。これらの出来事はたった数ヶ月の間に起こった事だ。多分、もつと多くの出来事があつたような気がする。だというのに、その多くがとても遠い。過去の彼方に行つてしまつたようだ。

たった数ヶ月で色んな物を失つたようだ。……………いや、置いてきた、だろうか。今は、一つの命を終わらせた”あの感覚”だけが手に残つていた。

—————
アインクラッド第三階層の主街区の路地裏で、一組の男女が話している。

「頼み事……………ですか」

一人はフードを目深に被つた少年。声変わり気味の声にも対面の女を見下ろす視線にも感情らしい感情が含まれておらずどこまで空虚で冷たい。

「ああ、そうダ。ちよつとオネーサンの頼み事を聞いてくれないカ？」

もう一人は、身長の高いローブの女。冷たい声と視線に物ともせず独特なイントネーションの声音で返している。

「すいません。今忙しいのでお断りします」

少年は誰かと話す事さえ拒絶するように素気無く答えて足早に立ち去ろうとする。

ローブの下で何処かニヤついた笑みを浮かべていた彼女は、その笑みを引つ込めて慌てて少年の裾を掴んで引き止める。が、少年はそのまま路地裏を抜けようとする。

「チョっ、ちよつと待つてくれヨ。ナナ坊とオイラの仲じゃあない力。ちよつとくらい話を聞いてくれヨ！」

「結構です。貴方と俺は、それ程親しかった覚えはありません」

「損はさせないからサ！」

「結構です。……というか、損か得かなら貴方と話してる時点で『損』でしょう。たしか『五分話せば100コル分のネタを抜かれる』でしたっけ」

「オ！ナナ坊も情報の重要性を分かってくれたみたいだね。オネーサンは嬉し……ちよ、チョーつと、本気で待つてくれないカ!!今、ナナ坊以外に頼める相手が居ないんだー！」

「……………」

「む、無視はやめてくれないカナ!?……………ほ、ほら！この間の借りを返すと思つてサ！」

「……………」

そこでやっと少年はピタリと歩を止める。が、女性は説得に必死なのか気付いていない。

「この間、カーソルがオレンジになって《圈内》に入れなくなつてたナナ坊を色々面倒見てあげただ口！カーソルの色を緑に戻したりとかサ！いやー、あの時は怖かつたナー！なんせ、カーソルがオレンジつてのは殺人をはじめとした何らかの犯罪行為した奴を表してルからナ！……犯罪者を相手に……つてアラ？」

そこで、やつと少年が足を止めて此方を見下ろしている事に気付いた。その視線には、生気が宿っているかさえ分からない濁つた瞳だというのに『忌々しさ』だけがこれでもかと込められている。

「……確かに貴方には『恩』があります。しかし、それを『貸し』とするのなら早い内に返した方が良さそうだ」

「お、おー。分かつてくれてオネーサン嬉しー」

「しかしー」

「しかし？」

そこで、女性は少年の右手が背中に吊り下げた《アニール・ブレード+4》の柄に添えられていることに気付いた。

「ーそれを傘に何度も頼み事……脅迫して来ようものなら容赦するつもりはありません」

「ここは、モンスターが侵入せず、プレイヤー間でも任意の決闘デュエル以外では殺傷する事が

出来ない《圈内》だ。しかし、少年の有無を言わせない殺気までこもった視線には、さしもの彼女もここがゲームシステムによって『安全』を保証されている事を忘れて息を呑む。

それも仕方がないかもしれない。何故なら、彼女は目の前の少年が人を殺せる人間だという事を知っているからだ。

「さ、流石にオネーサンの事、目の敵にし過ぎじゃないか？まあ、情報屋（こなごと）をやつてるからかもしれないけどナ」

「それもあります。が、根本的に貴方は信用ならない。恩がありますし、感謝も勿論して
います、それとこれとは別だ」

「……………信用してない……………いや、出来ないのは『オレっただけ』じゃなくて、『自分（ナナ坊）以外全員』の間違いじゃないかな？」

「……………どちらでも構いません。それで…………『貸し借りはこれで無し』で良いですよね？」
少年から剣呑な視線が女性の小柄な肢体を射抜き、直剣の刃と鞘がぶつかる小さな音が耳を叩く。

「りよ、リョーカイダ。あの時の『貸し』これでチャラにしヨウ」

少年の服の裾を掴んでいた両手を離し、一歩二歩と下がる。少年も右手を柄から離し、改めて彼女に向き直る。

「……それでは、一体何の依頼でしょう。『殺人』を含めた護衛でしょうか？そういう事なら、お断りしたいのですが……」

少年の口から、忌避はしているものとても自然に人を殺すという言葉が紡がれる。

「い、いきなりブツソーだな……。そんな訳ないだろう」

「しかし、『俺にしか』頼めない……。もしくは、頼み辛いこと、なのでしょう？」

「だから、んなブツソーな事頼まなーよ!!……ちよいと厄介なクエストの調査の依頼だ!!」

流石に小柄な女性も少年に声を荒げる。心外だ、と言わんばかりに。

「はあ、クエストですか……。依頼を受けるの構いませんが、それってワザワザ俺がする必要のあるものなんですか？」

そんな彼女の叫びも何処吹く風と言わんばかりに半分無視する少年。どこまでもマイペースな少年に項垂れた女性は、もう一度奮起し、「チツチツチツ……」と右手の人差し指を左右に振り、

「ナナ坊はオレっちの依頼が『ただのクエストの調査』だとモ？……違うんだナー、コレが。オイラが調査して欲しいのは通称《エルフクエ》って呼ばれてるー」

ー S A O 初の大規模キャンペーンクエスト

サ
路地裏で一匹の《鼠》のニヤついた笑みが零れた。現実と仮装が

EP—e1f② 森に響くは——

第三層南部エリア全体を埋め尽くす深く暗い森。その森を縫うよう通った未整備の道から外れなければ何の不自由も無く主街区をはじめとした重要区域に辿り着く事ができる、しかし、それは、「道を外れなければ」の話。その心許ない道を少しでも離れると、360度全方位を囲む木と濃霧、生い茂った枝葉による日が遮られ薄暗くなった視界によって自身の位置を見失う。更には、プレイヤーが持つマップ機能さえ制限されており、一度迷えば二度と外には出られないと言われている。

ここは、通称《迷い霧の森》。延々と続く木と霧、そして木に擬態したトレント系モンスターによって構成された天然のダンジョンである。

「しまった。これは完全に迷った」

第三層南部の森の中で、一人の少年の疲れを滲ませた眩きが漏れる。少年の名前はナシ。彼はある情報屋の調査依頼を受けてこの森の中を歩いていた。

「あの情報屋の女……。事前情報ガバガバかよ……」

彼の片手小さな冊子があった。その冊子は、手のひらより二まわり大きい程度の小冊子で、裏表紙には一応「ネズミ印」が押されているが、どうも作りが粗く急造感が否めない。彼が森へと入っていく直前に情報屋に息急ぎ切った様子で「サービス」として渡された物だ。おそらく、本当に急いで用意された物なのだろう。

その冊子の開かれたページには件のクエストの開始地点を図解されている。されているが……

『『大体、この辺』って……。このだだっ広い森のど真ん中とか迷って下さいって言うてるよえなもんじゃねーか！』

冊子には、第三層南部の地図のほぼ真ん中に大きな円が描かれており、無造作に矢印と『『大体、この辺』』と書かれているだけだった。

その程度の情報で《迷い霧の森》に入ってしまった彼も彼だが、それをツツコム人間は居ない。

一応、情報屋を弁護するなら、件のクエスト開始地点は第三層南部の中心のランダムな位置で発生するので、第三層解放からそう時間が経っておらず件の《キャンペーンクエスト》をこなしているプレイヤーが少ない為、これ以上のクエスト開始地点の特定が現状ほぼ不可能なのである。

『『クエスト開始地点付近では剣戟の音がする』か……。それが聞こえなかつたら二度と

人里には戻れないかもしれない……」

森に入ってからプレイヤーが持つマップ機能の大部分が制限されており、マップを見ながら元の位置に戻るといのはほぼ不可能だ。

「剣戟、剣戟……」

そう呟きながら耳をそばだてていると――

『モロロロロロロロロロロ！』

――という特徴的な喚き声と共に視界が暗くなる。

影だ。それもナナシよりも巨大な生物の影。それがナナシに覆い被さるように近付いて来た。

影の正体は、《トレント・サプリング》。この第三層に生息する樹木と人間の特徴を合わせ持ったトレント系モンスター最下位種。木に擬態し、近付いてきた獲物を奇襲により襲う習性を持つ。

「お前は、お呼びじゃねえっての」

《トレント・サプリング》の振り下ろされた腕は、ナナシが右足を軸に回転し半身になることで紙一重で躲かれる。

「てか、奇襲なのに叫ぶとか頭が悪過ぎる……」

一閃。いつの間にか鞘から引き抜かれた片手剣が青の燐光と共に振り下ろされた腕

を斬り落とす。そして、もう一閃。一撃目の上段斬りから飛び跳ねるように繰り出された二撃目は、容赦なく《トレント・サプリング》の幹を捉える。

片手剣・縦二連撃 S S 《バーチカル・アーク》。上段からの斬り下ろしと下段からの斬り上げで「V」の字を描くように振るわれるソードスキルが、モンスターのHPを削り飛ばす。

「まあ、知能をコレに求めること自体が間違えているか……いろんな意味で」

振るった片手剣を鞘に戻すのと同時に、モンスターが派手な破碎音と共にポリゴンの粒子となって空へと消えていく。

その音を背後で感じ取りながら、息を吐く。

「コイツ等の対処は慣れてきたが……いい加減疲れた。日が落ちるまでに森を出ないと本気でヤバいかもしれん」

しかし、一度森に入り自分の位置を見失った以上自力での脱出はほぼ不可能。ならば、情報屋の依頼通りに件のクエストをこなすしかない。

クエストのスタート地点に着く以前から躓いている現状に溜息を吐きながら、ナナシの姿は木々の影と深い霧に消えていった。

—————

時を主街区の路地裏で情報屋とナナシが話していたところまで遡る。

「大型キャンペーンクエストですか？」

ナナシの口から小さな疑問が呟かれる。

「おや、知らないのかイ？……まア、その名の通りクエストの一種サ」

ネズミ面の小柄な女がどこか笑いを嘯み殺したような声が響く。

「普通のクエストと違うのは、そのクエストがそれなりに長いシナリオ仕立てになつて
るつてトコだナ」

「長いというのは、厳密にはどの位ですか？」

その疑問に女の笑みが更に深まる。

「よく聞いてくれター！今回のキャンペーンクエストはなんと第三層から始まつて、エン
ディングは第九層！更に、そのクエストは二つの陣営に別れる訳だが、一度選べば選び
直しは不可能。ついでに、クエスト自体の受け直し不可の各プレイヤー一度きり！つて
な具合の同プレイヤーによるルート検証不可の情報屋泣かせの鬼畜クエスト、サツ！」
「……………はあ、そうですか」

「……………いや、ノリが悪いぜ、ナナ坊…………。もつと『な、なんだつて』つて返しをくれヨ」
「媚びんな気色悪い…………。いえ、気色悪いのでやめて下さい」

数瞬の間、情報屋はゴミを見るような視線に晒されたという。

「し、辛辣…………」

「情報屋泣かせですか……。確かに一度きりとなると調べるのも苦勞すると……。しかし、ベータテストの時は第十層まで行ったと聞きました。なら、そのクエストは攻略されているのでは？それとも、本サービス開始で追加された新しい要素なのでしょう？」

「ナルホド、無視するの力……。まあ、イイけど。……。一応言つとくと、この《キャンペー
ンクエスト》……。通称《エルフクエ》ってのは、ベータ時代からあつたよ」

「……………なら」

「デモな、今回のサービス開始後にベータ版では誰も入れなかったシナリオのルート分岐に入った奴らがいるんだよナー。……。実際にベータの頃からあつたのか、それともサービス開始時に追加されたのかは不明だが、今まで誰も知らないルートだつてのは確かだ」

「成る程……。しかし、何故自分なのでしょう？今はその特殊なルートの解放条件が分かっているのでしょうか。それなら誰でも良いと思うのですが」

「アー、それナー……。実は、その条件つてのが結構実力を問われるんだワ。それも最前線のプレイヤーが十中八九しくじるレベルだ」

「それで俺つて……」

「まあ、確かに駄目元つてのはアるナ。最前線プレイヤーに頼む訳にはいかなしいし、かと

いって中途半端な奴に頼んデもナー……………だから、ナナ坊って訳ダ！最前線プレイヤー並みの実力があって最前線に居ない。ついでに対人戦も出来るとナつてくるとナナ坊しかいねえンダ！」

何処か必死に説得するように手を合わせ、頭を下げる情報屋。

「分かつてる範囲の情報もタダで送るから、ナ？」

ナナシは情報屋との付き合いが短い。それでも何となく分かっていることがある。

この女は――

「つー訳で、よろしく頼むヨ」

――何処までも、嘘臭く、演技臭い。

情報屋は合わせた手の後ろの顔を上げる。そこには、やはりと言うべきか人を食ったような笑みが溢れていた。

「……………」

ナナシにとってこの依頼は、「借りを返す」為だから断る気は無い。無いのだが……………。

この笑みを見て、ナナシは辟易とした様子で空を仰いだ。

――

「あの時、断つとけば良かった……」

情報屋との会話を思い出しながらの眩きは、木々と霧の向う側に消えていく。完全に後の祭りだ。

この森に入ってからどれくらい経っただろうか、延々と続く変わり映えしない景色に時間感覚までおかしくなり始めた。

「1〜2時間は歩いたような気分だが、こういう時総じて大して時間が経ってねえんだよなあ」

森に入ってからもう6度もモンスターの奇襲に会っている。レベルによる安全マージンは十分以上にとっており、そうそう負ける事も命を脅かされる事もないが……。それでも6度襲われたのだ。ほんの数ヶ月前まで普通に学校に行き学生として生きていた彼には、この終わりの見えない森の探索という状況もあって疲れと嫌気に内に募らせる。

「このまま夜になりにもしたら……今以上に悪い視界……夜行性のモンスターの出現率の増加……休息も満足に取れない状況……あ、ホントに積むかもしれん」

今になって、顔を少し青褪める。

「クソツ、生きて帰ったら絶対にあの情報屋をとつちめ……ん？」

その時、ナナシの耳にこの森に入って初めて聴く音が耳を叩いた。

「——これは、金属のような硬質な物同士がぶつかるような……」

「……………剣戟ッ！」

こんな偏屈な場所で響くこの音は間違いない。キャンペーンクエストの開始地点ッ

！

クエストは逃げはしないが、森から抜けられる手掛かりに反射的にナナシは音のする方に駆け出した。

数分後。

『ハアッ！』

『シィッ！』

2つの裂帛の気合いがぶつかり合っている。

それをナナシはネズミ印の小冊子を片手に一本の木の幹に隠れるようにして覗き込んでいた。

そこは今まで無造作に乱立していた木々が無く開けた空き地となつている。そして、その空き地に二人の人が剣を片手に激しい戦いを繰り広げていた。

いや、あの二人を人間と言うべきかは疑問が残る。何故なら——

「——耳が長いなアイツ等……。もしかしくなくても、エルフか？指輪物語とかの……も

う片方は……色合いからダークエルフ？」

一人は金髪で緑眼というオードックスなエルフの女性。ただ、手に持つ武器が弓ではなく片手用直剣だ。……あと、巨乳。エルフは細身というイメージをぶち壊すには十分過ぎるレベルだ。

もう片方のダークエルフは茶褐色の肌に白の長髪を後ろで結った男性。肉厚の片刃の一曲剣（サーベル）を振るっている。

しかし、コイツらー

「何、コイツら……強すぎね？カーソルがもうほとんど黒なんだが……」

ナナシの視界には、二人の頭上には「未受注クエスト」を示す「！」マークと一緒に、もうほとんど黒に近い赤のカーソルか浮かんでいた。

SAOのプレイヤーの視界に写った生物には、頭上にひし形のようなカーソルが浮かんでおり、その生物の分類によって色が変わっている。通常のプレイヤーなら緑、NPCなら黄色、モンスターなら赤といった風いだ。そして、モンスタアのカーソルには自身とのステータスとの差によってカーソルの赤の明度が変わる。弱ければライトピンク、強ければダーククリムゾンといった風いだ。

そして、あの二人のカーソルカラーはダーククリムゾン、間違いなく格上。それも逆立ちしても勝てないレベルだ。

「アレの間に入んの?! 会話すんの?! 正気かよ?!」

慌てて、手元の冊子に視界を移し、ページを捲る。そこには、

『キャンペーンクエスト』秘鍵戦争』

・概要

このクエストは、『フォレストエルフ』と『ダークエルフ』による秘鍵をかけた戦争で、2つの陣営のどちらかに所属し、与えられたクエストをこなしていきます。

※なお陣営の変更は不可、受け直しも不可の一度きりのクエストとなります。

1. 第1章《翡翠の秘鍵》

・クエスト受注場所……第三層南部中央《迷い霧の森》内部

・クエスト依頼者……《フォレストエルブン・ハロウドナイト》or 《ダークエルブ

ン・ロイヤルガード》

・クエスト内容……翡翠の秘鍵をクエスト依頼者の陣営に届ける

・クエスト概要

このクエストは二人の依頼者の内一人しか受けられず、受注した瞬間、もう片方がモンスター扱いになり依頼者と共に討伐する必要があります。

なお、依頼者と敵対依頼者は第七層エリートクラスモンスターであり討伐は困難を極めます。

しかし、プレイヤーのHPが半分を切るとクエスト依頼者が自爆攻撃により依頼者と共に敵対依頼者が消滅します。

追伸

件の特殊ルートに入るには、ここでプレイヤーのHPが半分になる前に敵対依頼者を倒すことで依頼者を救う必要があります。

前任者は《ダークエルフ陣営》で頑張つてルから、ナナ坊には《フォレストエルフ陣営》でやって欲しいナー』

……ちよつと待とうか。

「……………ちよ……………ハアツ?!……………ハアツ?!ハアアアアツ?!?!?!?!第七層?!倒すの!?!アレを!?!てか、倒したのか!?!アレをお?!馬鹿じゃねえの!!」

少し悲鳴混じりの絶叫が森に響いた。

EP—elf③ この間、僅か1分（笑・仮）

ーあ、不味い。

木の後ろで大声で叫んでしまったナナシは顔を青くする。何故ならー

『誰だッ!!』

あんなデカい声を木を一本隔てただけの所に居たエルフ二人が聞き逃さない訳がないのだから。

先程まで鏝迫り合いを繰り返していた二人のエルフがお互いを警戒しながらも此方を睨んでいる。

クソがッ!?しくじった!……どうする、逃げるか?アイツらは敵対し合っている。ここで全速力で逃げたら追ってこないはず。

しかし、それは正しいのだろうか?確かに、逃走は高確率で成功する。だが、その後は?今、俺がこの森から出るにはあの依頼者のどちらかに道案内をしてもらう必要がある。……なら逃走は却下。そうなると、無難に戦って依頼者を自爆攻撃で失う訳にもいかない。……おいおい、本当に倒すのかアレを……!?ネズミ女は倒せといつてやがったが無理だろアレは……クソ、あんな化物を倒した奴は、相当な馬鹿か変態だな!

『さっさと出てこい！さもないと……』

エルフの女が此方に剣を向ける。

時間がねえ！このまま無策で突っ込むか？いや、ありえねえ。んな事したらここで斬られて死ぬか、森で彷徨って死ぬかだ。……そもそも勝利条件が鬼……ちく……。いや、待て。確かクエストのクリア条件は、あのエルフ二人が取り合っている《秘鍵》つてのを各陣営どちらかに届ければ良かった筈だ。どっちが持つてるかは知らんが……おそらく敵対した方のエルフの懐にでも自動生成されると見るべきかなら、隙を見てかすめ取って逃げるつても手か？確か、俺のHPが半分切ったら味方エルフが自爆するんだったよな。なら、その前に秘鍵を奪えたら、そのまま道案内役のエルフも確保できそうだな。

そう考え、木の後ろから二人のエルフを見る。どちらのエルフ

もカーソルカラーがダーククリムゾンの化け物だ。

……かすめ取るの？アイツらから？……す、少なくとも「倒す」よりかは簡単な筈……。思い付きだが、これでいくしかねえ！

ナナシは背にした木から立ち上がり、二人のエルフに姿を見せる。ナナシの姿を確認したエルフ二人が叫ぶ。

『人族が……で何をしている！』

『邪魔立て無用！無関係な人族はここから立ち去れ！』

「ーうるせえ！こつちも帰り道が分かってたらとつと回れ右しとるわ!!」

こう叫んでしまいたいが、それは目の前のエルフ型NPCには関係の無い話。

ここはネズミ女の要望通りフォレストエルフこと森エルフ側に付くことにする。

……しかし、どちらに付くにしても、プレイヤーにはこの戦闘に首を突っ込む理由が無い。こういう時、どういう口上で敵対あるいは協調の意図をあの2人……いや、最悪森エルフのデカ乳女だけにでも伝えるべきか……。

「……………悪いな」

何も思いつかなかったナナシは、小声の謝罪と共にダークエルフの白髪ロン毛に鞘から引き抜いた《アニールブレード+2》を向ける。

数瞬の間があった後、白髪ロン毛はナナシの意図に気付いたのかみるみる顔を険しくさせる。

『愚かな…………』

『人族にも物の道理という物が分かるということだろう』

何かエルフ2人が喋っているが、ナナシはそんな事1つも聞いていない。彼の頭にあるのは……保身だ。物の通り？すいません、そんな物はありません。

「…………取り敢えず、攻撃はあのデカ乳に全部押し付けて俺はサポートに徹するか。あの

エルフ2人の実力は互角っぽさそうだし……そうすりや死ぬことは無いだろう」

卑怯？ 姑息？……結構！ 全ては勝利と生存の為に！ 要は勝てばよからうなのだあああああ!!

もう危機的状況過ぎて、脳内がヤケを起こし始めたナナシの耳に、冷水を流し込まれるようにダークエルフの声が届く。

『いいだろう。ならば人族、貴様からこの劍の露と消えろ！』

白髪ロン毛の劍先がナナシに向く。

「……………え？」

どうやら、あの白髪ロン毛の敵対値ヘイトを今の今まで戦っていた女より稼いでしまったようだ。もしくは、ただ単に複数人を相手する時に取り巻きの『雑魚』から始末する常套手段を知っていただけかもしれない。

ーき、汚い！ 流石、人型モンスター！ やり方が汚い!!

先程の思考は何処に行つたのか、ナナシは目の前の白髪ロン毛に頭の中で罵倒する。

ー……………いや待て。今、俺は「目の前」と言つたか？ さつきまであのダークエルフとそこそこの距離があつた気が……………ツツ!?

ナナシは、反射的にアニールブレードを両手を使って、正面をガードするように構える。

その瞬間構えた剣に衝撃が走った。

ダークエルフの神速の一撃がナナシを吹き飛ばす。ナナシのHPがそれだけで3割吹き飛んだ。

今のダークエルフの放った一閃の狙いはナナシ首。何がHP半分で、だ！一撃で仕留めに来やがったツ！つか、ブロックしたのにダメージが半端ねえ！あんなのまともに食らったら一撃でHPが全部吹き飛ぶわツ！！

「畜生がツ……」

ナナシは吹き飛ばされた衝撃にまかせて距離を取ろうとする。しかし、それをダークエルフは許さない。背中に担ぐような構えられた剣から青の燐光が放たれる。

あれは……不味いツ！！

ダークエルフのソードスキルは、片手剣・突進SS《ソニックリープ》。システムアシストという現実には無い力によって強化された脚力による突進とそこから放たれる袈裟懸けの斬撃で構成されたソードスキルだ。

ダークエルフは、宙に浮き無防備なナナシを確実に仕留める気だ。

「……舐めんなあ!!」

殆どやけくそ気味に懐から投剣を抜き取り、投げる。

――投剣・基本SS《シングルシユート》。

無理な体勢からだった為、急所は当てる自信は無いが白髪ロン毛の何処かには当たる。それでも、相手は格上。避けられるかもしれないし、剣で弾かれるかもしれない。それでも構わない。狙いはソードスキルをキャンセルさせる事と距離を取る時間を稼ぐ事。それが出来たのなら当たったかどうかは関係無い。

だがー

『……グッ』

「……なにい!？」

ダークエルフの男は避けなかった。弾かなかった。その身に受けた。ナナシの投剣はダークエルフの左肩に深々と突き刺さる。

それでもー

「殺意が高過ぎだッ!クソがあ!!」

ーそれでも、ソードスキルの構えは解かれる事は無かった。

ナナシの身体がソードスキル発動の弊害で硬直し、致命的なまでに……動かない!?
ダークエルフのソードスキルが発動する。

—————

「……!？」

ダークエルフの男は、目の前の吹き飛ばした人族の少年を評価し直す。

（ただの人族と侮っていたが、それは私の間違いだった）

目の前の少年は、どうしようもない状況で起死回生を狙って投剣を飛ばした。狙いも悪くない。しかもまともに構えの取れない空中でだ。あのような状況で私はこの少年のように反撃が出来るだろうか？……おそらく否だ。

（何処に当たる？……頭、違う。心臓、違う。目、違う）

ならば、気にしない。この少年を倒した後にあのエルフの女との続きが待っている。戦闘に支障が出る場所ならば避けるなり弾くなりしたが、その問題は無い。ならば——（良いだろう、これは私がこの少年を見誤ったツケだ。この身で受けようツ）

かくして、投剣は私の左肩に突き刺さった。

「……グツ」

「…………！！？」

（あの状況で私に当ててくることは見事。だが、人族の少年。お前の落ち度は急所に当てられなかった事だ。このツケを身を持って払ってもらおう！）

「……………ツッ！……………！！」

「………ダークエルフのソードスキル《ソニックリープ》が炸裂する。

「……………！！！！」

その瞬間、目の前の少年が今までで一番大きく何かを叫んだ。だが、それはダークエ

ルフの男は聞かない。この一撃を確実に当てる為に全神経を集中させる。

——その瞬間、顎に強い衝撃が走った!!

—————

ダークエルフのソードスキルが随分とゆっくりと近付いてくる。絶対的な「死」に体が全力で拒絶しているのだろう。

——「あ、これは死んだな」と思った。

しかし、心がそれを受け入れようとしている。

マジかー、と思う。俺の人生ってこんな呆気ないのか、とも思う。

——……け……な。

これは終わったなー、とか思った。まさか一ヶ月程度で後追いかー、なんて思った。

——ふざけんな、俺は何も出てこないだろうがッ

まあ人生こんなもんか、なんて思った。頑張った、って思った。まだやるべき事、やりたい事があつたのになあ、とかも思った。

——まだやるべき事があるだろうがッ……絶対に殺すって復讐してやるってあの剣に誓っただろうがああああ!!

「こんな所で死ぬるかあアツツ!!」

その瞬間、心が全力で「死」を拒絶する体に追いついた。ナナシの心が、体が全力で

「生」への執着に吠えた！

エルフの女は、何が起こったのかと困惑した。

ただ、目の前の状況は分かる。ダークエルフの男と人族の少年が二人揃ってカチ上げられているのだ。

ただし、ダークエルフの男は頭から、人族の少年は足からだが。何を見ているのか一瞬分からなかった。しかし、あれは——

「……………蹴り……………か？」

「……………グヘツ」

ナナシは無様に頭から落ちた。ダークエルフは顎をかち上げられて空を見上げたようだが持ち直している。それに比べて、無様、不細工、カッコ悪い事この上無い。

だがしかし、九死に一生を得た。

「持つてて良かった《体術スキル》……………！」

体術スキル・蹴技《ゲンゲツ弦月》。

足に灯ったソードスキルの燐光の軌跡が月のような半円を描く蹴り……………まあ、プロレスで有名なサマーソルトキックだ。それが運良くかどうかは分からないが、あの白髪口

ン毛の顎にクリーンヒットしたのだ。

だが、それは普通は起こり得ない現象だ。何故なら、ソードスキルの発動前と発動後には数秒の硬直時間という物が存在するからだ。発動前の「溜め」はソードスキルの構えを無理矢理解くことでキャンセル可能だ。当然、ソードスキルは発動しないが。しかし、ソードスキル発動後の硬直時間は無視出来ない。

故に、《シングルシュート》で敵のソードスキルをキャンセル出来なかった時点で何も出来ず、ダークエルフのソードスキルが直撃するの待つだけの筈だった。しかし——「まさか、《体術スキル》にソードスキル発動後の硬直を無視できる隠し要素が存在するとは……」

ナナシはその隠し要素を知らなかった。理性的に考えればこの対処は不可能。しかし、全力で「死」を拒絶した本能が「正解」を「起死回生」を引き当てた。……駄目元が偶々上手くいったと言え、それまでだが……。

あ………本当に持ってて良かった！命を拾ったんだ。もうあのクソ辛い岩殴りクエストでの苦労分の元は取った！

『おのれ……ッ』

綺麗に顎にキメられた白髪ロン毛は、顔を怒りの色に染め再度突撃をかまそうとして
いる。

ファックだ、ドチクシヨウ！あれだけ綺麗にキマったんだから頭くらい揺れて前後不覚にでもなれよ！……しかし、不味い。普通に持ち直して倒れる事の無かった白髪ロン毛と違って、此方は体勢が整えきれてない。というか、まだ尻を地面に付けている状況だ。

ダークエルフが今度こそ確実にナナシを仕留めるべく突っ込んできた。

「九死に一生を得たばつかなのに、またかよッ！」

もう不意打ちは効かないだろう。もう駄目元で剣で防ぐしか無い！なんとか防げたからHPは残るはず。ネズミ女の頼みとか知った事か！んな物より我が身が可愛いわ！！この状況で生き残るくらいのリアルラックがあればこの森くらい余裕で抜けられるわ！！

黒の弾丸と化して突っ込んでくるダークエルフとナナシの間に一人分の影が割り込んだ。

金属同士がぶつかる派手な音がする。

『……なッ!?!』

「……………あ?」

『……………ふッ』

その派手な音と共にダークエルフの脇腹に蹴りが炸裂し、空き地から森の中に吹き飛

び、近くの巨木に激突する。ナナシのソードスキルでは倒れなかったダークエルフがだ。

えー……ただの蹴りだぞ？俺の《弦月》よりも威力あんの？なんか理不尽……。

『私がある事を忘れてもらっては困るよ、ダークエルフの騎士よ』

ナナシの耳に、もう半分くらい存在を忘れていた森エルフの女の声が届いた。

『人族といい、フォレストエルフといいやってくれる……ッ』

開けた空き地から森の中に吹っ飛んでいったダークエルフが恨み言を呟きながら立ち上がる。

それに警戒しつつ森エルフの女がナナシに話しかける。

『大丈夫か、人族の。先程の攻防は見事だったが、随分と危なっかしかったぞ』

それに対しナナシは、

「……………お………」

『お？』

「おつつつそいわツ、デカ乳女ア！助けるならもつと早くしやがれツお願いします。何でもしますから!!」

頭が混乱しまくって失礼なのか礼儀正しいのか意味分からない言動が森に響き渡った。

EP—e l f ④ IRREGULAR!?

あ……しまった、と思うがもう遅い。

『で、デカ……ッ?!人族ッ! 貴様、初対面のくせに失礼だぞ!』

デカ乳改めーフオレストエルフの女騎士は、ダークエルフの騎士への警戒を忘れてこちらを睨みつけてくる。当然だが。

こういう時はいつも通りに話を変えるか。

「そんな事よりもー」

ヒュオツ!と風を切る音がナナシの耳元を掠める。

『そんな事より? 貴様、私を愚弄しておいてー』

顔を怒り(と若干の羞恥)で赤くさせた顔で手に持った剣がナナシの首元に添えられている。

「悪かった!アレは俺が悪かった!!だから剣を向ける相手を間違えるなッ!!」

さつきまでの態度とは打って変わって、両手を上げての全力謝罪。だが、ナナシは人間関係に関して学ぶ事は無い。故に同じ間違いを繰り返す。

「それよりもー」

『それより?』

首筋に剣先が食い込む。

「いや、本当に大切なことー……」

そのタイミングで、ナナシはダークエルフの不審な動きに気付く。ダークエルフの騎士は、此方を警戒しつつも、何故かチラチラと明後日の方向を盗み見ている。これはー。

「……ーを聞きたかったんだが、もういいや。大体分かった」

ー予想はしてたが、やはり面倒な方だったか……。

『貴様、いい加減に……』

更に剣筋が首の皮に食い込むが、ナナシは慌てていない。

「良いのか?あのダークエルフ逃げようとしてるかもよ」

俺がこの中で一番弱いとしても、二人のエルフ騎士の実力が拮抗していた以上、人数差は致命的であろう。ここでダークエルフが逃走を選択肢に入れるのは当然の判断だろう。そして、このタイミングでこの選択肢を考えると、ある事実を指す可能性が高い。

ーやはり、あの白髪ロン毛が《秘鍵》を持っていそうだな。

『……………』
 そこで、やっと自分が今まで戦っていた相手の存在を思い出し、ダークエルフの騎士に向き直るフォレストエルフの女騎士。しかし、先程までの一件を忘れる気は無いようだ。

『……………良いか、先程の愚弄は忘れた訳でも許した訳でもない。ただ優先順位の問題で後回しするだけだ。それを忘れるなよ』

……………忘れちゃえば良いのに。それはそうと、これで仕切り直しが終わった。当初の予定通り人数差を全力で利用し、有利を取る！

フハハハハハ！戦いは数だよ兄貴（兄貴が誰かは知らんけど）！どんな手を使おうが……………最終的に…勝てば良からうなのだアアアアツ!!

デジャブである。もうすっごいデジャブである。ならばきつとー

『いやあ、もしかしてかなり良いタイミングでの助っ人じゃあないですかね、ストルズ殿？』

ーきつと、ナナシの甘い見通しなぞ、直ぐに覆えることだろう。

ナナシの視界に、乱入者の女の名前が写る。その名前は《ダークエルブン・ウルフハンドラー》と記されている。どうやら、敵に援軍が来たようである。

—————

今まで一度たりとも聞いたことのない女の声が明後日の方向から聞こえた。ナナシ、ダークエルフ、フォレストエルフの3人全員がその声をした方向を見る。

そこに居たのは、ダークエルフの女。三日月のような笑みを貼り付けて木の上から此方を見下ろしている。

——なんだコイツは?!

それに顔を青くするナナシ。乱入者であるニヤニヤ女も他のエルフ2人同様カーソルがダーククリムゾンのエリートモンスターだ。だが、そんな事は問題じゃない。問題なのは、《鼠》特製の攻略本にこの女の存在が載っていない事だ。完全なイレギュラーだ。このイレギュラーがどこまで事態を想定外の方向へ持つていくか分からない。

『貴様、《狼使い》! 卑しい獣使いの分際で何をしに来た!!』

白髪ロン毛が味方であるはずのニヤニヤ女に敵意を向けている。どういう事だ? 味方じゃない……いや、一枚岩じゃないのか? それともただ個人がいがみ合ってるだけか? クソ、情報が少なすぎる。

『いやはや、ストルズ殿はいつも怖い顔をしておりますなあ。今回は偶然ですよ。任務でたまたま近くを通りかかったものでしてね。そうしたら、ストルズ殿がどうも劣勢のようでしたのでここは手助けせねばとね』

『不要だ。貴様の手を借りるくらいなら——』

そこで、ニヤニヤ女の笑みが消える。

『そういう訳にもいかないですよ。貴方同様、この私がこんな下層に出張ってくる必要がある位には事態は逼迫しています。貴方個人の感情なんていちいち気にしてられないですよ』

話を聞くに、ダークエルフ陣営で何かしらの問題が起こってあのニヤニヤ女が駆り出された、と見るべきか。しかし、わざわざココで出くわすか？はつきり言つて勘弁して欲しい。

『よいしよつと』

ニヤニヤ女が木から飛び降りる。

『ほら、お前達。仕事ですよ。出てきなさい』

「ちよつ?!……マジかよ?!」

どうやら、敵の援軍はあのニヤニヤ女だけではなく、女が率いる部隊まるまる1つ分らしい。流石に、部下の連中はそれ程強くなさそうだが、数が数だ。これは本格的に駄目かもしれない。

ナナシは隣のアレストエルフに話しかける。

「おい、デカ乳」

『貴様、また……ッ』

「んな事あ、どうでも良い。それよりもお前、ここで撤退する気あるか？はつきり言つて現状絶望的だぞ」

『言われなくとも分かつている。だが、自分の命よりも任務が優先される事もある。そして、それが今だ。……貴様こそ逃げないのか？本来、この戦いに人族は関係無い筈だぞ』

「……………」

まあ、そうと言やそうなのだが……俺、この森の中で迷子なんだよなあ……。ここを出るのには道案内が必須なのだ。

そして何より敵は逃してくれそうにないだろう。人数による差は歴然。少なくとも同じ状況で俺が有利な側なら絶対に逃がさない。

『あの騎士の男と後から来た女。片方だけならどうにかなるが……同時となると厳しいか』

え？そうなの？一人相手でも厳しそうなのに……。そう言えば、モンスター危険度を示すカラーは第7層エリートモンスターである彼女らエルフ騎士で最大のダーククリムゾンだったが、当然このアインクラッドの最強モンスターでは無い。つまり、カーソルカラーがダーククリムゾンの連中は計器の最大値がソコだからソコに留まっているだけで、その中でも差は明確に存在しているのだろう。

「あの取り巻き連中は？」

『あの兵士どもか？……物の数に入らん。居ようが居まいが、問題にならん』

マジすか……。いや、確かにあの取り巻きだけなら俺でもどうにかなりそうだが、それでも厄介な事には変わりがないというのに……。さすが、エリートモンスター。

「……片方だけなら何とかなるんだな？」

『当然だ』

そこには、強がりも過剰な自信も無い。あるのは、確信。ただ、そうなると何の気負いもなく淡々と答えるエルフ騎士の姿がある。

……………あー、クソ！ならやるか!!

「なら、俺があのだークエルフの騎士をやる。アンタがそれ以外だ。いいな」

『構わんが、任せて大丈夫なのか？』

「問題無いとは言わないが、やりようはある。寧ろ、あの未知数のニヤニヤ女を押し付けられるよりかは幾分マシだ」

『……………心得た』

退かない以上、今ある手札でこれが最善であることが分かっているのだろう。フォレストエルフの女騎士は、ややあつてから同意の意を伝える。

「その変わりと言っちゃ何だが、俺が退くと判断したら一緒に退いてくれ」

『……貴様、私が言った事をー』

「聞いてたよ。アンタが自分の命より優先する任務つてのは連中を始末する事じゃないんだろ」

適当に《秘鍵》ぶんどつて逃げよう。

『……成る程、確かにそうだ』

「じゃ、そう言うことで」

言つて、意識を完全にあのダークエルフ騎士にむけようとする。しかし、そこでエルフ女騎士に呼び止められる。

『待て』

「……ンだよ」

『そういえば、貴様に私の名前を伝えていなかったな。これから背中を預ける相手に『デカ乳女』などと呼ばれたくはないのでな。……私は《カレス・オーの騎士》ティアル。一応……フォレストエルフと呼ばれている』

あー、そう言えばまだだったわ……。とうかこの女、根に持ち過ぎだ。あと、「一応」つて……。

「なんか、引つかかる自己紹介だな。……俺はナナシ。見ての通りただの人族のガキだ。よろしくな乳女」

『貴様、また……ッ』

「それは『また後で』 だろ?」

『……………フン。後で覚悟している』

この戦い。ハッキリ言って勝ち目が薄い。これが脱出不能のデスゲームじゃなく普通のMMORPGだったら即クソゲー扱いだな。いや、そもそも命懸けのデスゲームな時点でクソゲーだったわ……。せめてこっちにも援軍を超越させてんだ。

……文句を言っても何も始まらない。やると決めたのだから、キツチリとやりきる。

仕切り直しによって、何故か更に混沌とした事態に陥ったがそれも終わり。俺にとつては二回戦目。デカ乳女にとつては三回戦目の火蓋が切つて落とされた。

EP | e l f ⑤ たった一月前の日々は遙か遠い過去の
彼方 (NEW!!)

仕切り直しから「いざ」という所で、一番初めに動いたのは、白髪ロン毛だった。

白髪ロン毛は、一瞬名残惜しそうな顔をしたと思つたら、俺とティアルに背中を向けて走り出した。その背中が木々にかくされていく。

「……………え？」

「……………あの野郎……………に、逃げやがったああああ!？」

数的優位を奪われ、相手が主導権を握られた事で”その可能性”があつた事が頭から自然に消えていた。

そうだよ! 彼奴らの目的は俺たちを殺すことじゃねえ! 《秘鍵》を自陣に持ち帰る事だ!!

「おい! デカ乳ツ!!」

『分かつているッ!』

このだだっ広い森で人を探すなどほぼ不可能に近い。つまり、ここで姿を見失つたら

クエストは失敗したも同然だ。……つうか、なんでこう想定外ばっか起こるんだよ!!もう鼠の攻略本が何の役にも立ってねえじゃあねえか!!

白髪ロン毛を追おうとするナナシ達に立ちふさがるようにニヤニヤ女が鞘から剣を引き抜く。

『行かせませんよお。ハイ、皆さん構えて〜』

そして、そのニヤニヤ女の前に一般ダークエルフ兵士の皆さん。

「邪魔だ」

『道を開けろ!』

ステータスの敏捷値が高いティアルが極限まで低くした姿勢で突っ込む。

ダークエルフ兵士はその突進を二人がかりで止めるつもりのようなだが……それを俺が許すつもりは無い。

軽く前方に飛び上がった状態で腰から両手に一本づつ投剣を構える。

投剣スキル《ツインシュート》。

両手が交差するようにして放たれた二本の投剣が、ティアルの背中をのを通り二人のダークエルフ兵士にそれぞれ突き刺さる。

そして、それに怯んだダークエルフをー

『……シィッ!』

ソードスキルでも何でもないただの一振りか盾を避けるようにして片方のダークエルフ兵士を捉え薙ぎ払う。

そして、吹き飛ばされたダークエルフ兵士がいた所を通り、もう一人の背後を取る。そして、振り向く事なくティアルの剣がもう片方のダークエルフ兵士を捉える。

『ガ、ガフ……』

準備中

『ちよおツ?!速!ハツヤ!?一瞬、完全に見えなかつたんですけどお!?!』

準備中——

「……ラアツ!」

片手剣・突進突きSS 《レイジ・スパイク》。

前方に突き出された剣が不可視の推進力を帯びてナナシを引つ張る。このまま白髪ロン毛を狙っても良いが、カウンターが怖い。だから、白髪ロン毛の進行方向やや前方を狙う。

ナナシのブーツが大地を削る音がする。

ソードスキルの推進力で生まれた慣性をブーツで全力で殺し、なんとか白髪ロン毛の進行方向を遮るようにして立つ。

『……………又』

ブレーキの時にまった土煙の中、ナナシは居住まいを正し、自身の剣を白髪ロン毛に向ける。

「……悪いな、ここは通行止めだ」

改めて、ナナシはダークエルフを注視する。褐色の肌にしろの長髪。エルフの特徴的な左耳に赤の宝石の付いたピアス。紫の衣服と防具に包まれ、右手には肉厚で片刃の直剣を持っている。そして、腰に小さなポーチ。

「おそらく、あそこに……」

小さな間があつて、ダークエルフの騎士は倒すべき敵をティアルからナナシに切り替えたようだ。

「……正気か人族。あの女の助力無しに私と戦つて勝てるんでも？」

「まあ、確かに……。俺とアンタが100回戦えば99回は負けるだろうさ。……だが、戦闘は一回こつきり。その始めて最後の1回目に俺が『勝ち』を引いたら良い話だろう？」
 『ほう。つまり、貴様は私と100回戦えば、一度でも私に勝てるでも思っているのか？』

「……そいつは、やってみないと何とも言えないな。案外10回は勝てるかもしれんな」

『抜かせ』

ダークエルフの騎士は、ナナシの言葉を鼻で笑って斬りかかった。

金属同士がぶつかり合う派手な音が辺りにこだまする。

「チツ、この女。戦えば戦う程強くなつていやがるッ」

《狼使い》と呼ばれたダークエルフの女が舌打ちをうつ。ウルフハンドラーの女から余裕の声はとつくに消えていた。ティアルは、そんな彼女に余裕を見せながら答える。

「ああ、実はこの剣はな。私がこの下層に降りてきた時にここの野営地から勝手に拝借してきた物でな。ようやく慣れてきたのだよ」

実際、一合剣同士が重なり合う度にティアルの剣の重みが強くなり、踏み込みが深くなる。

「いつもは、もつと特別な物を使つていてね。こういう普通の剣では使い勝手が違い過ぎて、どうもしっくりこなかったのだ」

ティアルの力強い一撃一撃にどんどん後ろに退いていくウルフハンドラー。

「慣れない武器でストルズ殿と互角にやり合つてたつて事かい。あー、これは貧乏クジ引い……………ツツ!!」

ティアルの剣が黄色燐光を放つ。一瞬の、ほんの小さな隙さえ逃さずソードスキルがウルフハンドラーに炸裂する。

片手剣・単発垂直斬りSS《バーチカル》。その一撃を何とか剣で受けて凌ぐも大きく吹き飛ばされた。

「あー、クソ！お前ら!!この女は私が抑えておく！だから、とつとあの人族仕留めてストルズ殿を連れて来い！どうせ、この女を相手にお前らは何の役にも立たん！」

何とか体勢を立て直したウルフハンドラーの命令に、加勢に入りたくても入れず剣を構えたまま棒立ちになっていたダークエルフの兵士達はストルズというダークエルフの騎士の下に向かおうとする。

「ほう……。抑える？この私を？」

「なッ!？」

ティアルは大きく後ろに飛んだ。たったそれだけで一番先頭を走っていたダークエルフ兵士の背後にまで追い付く。一人のダークエルフ兵士とティアルが互いを背中越しに捉える。

「…………え？」

そして、そのままティアルの一閃が兵士の頭部を捉えた。兵士は頭部の口から上を失い、地面に倒れ、身体がポリゴンに変換され空へと溶け消える。

「悪いが、人族との約束だね。お前たちは全員、私が相手をする決めてるんだ。死にたくなければ、そのまま何もせず、ここで突っ立ってもらえないだろうか？…………でなけ

れば、先に君らを始末する」

残った兵士は何も言えず、ただ立ち尽くすしかなかった。

「無粋はこれで入らないだろう。お手並み拝見といこうか、人族の少年……いや、ナナシ」

—————

ティアルがウルフハンドラーを相手に有利に事態を進める中、ナナシはダークエルフ騎士を相手に劣勢を強いられていた。

『シヤアアアツ!!』

「……………ツイイ!?!」

青の燐光が灯ったダークエルフの剣閃を紙一重で避ける。この男のソードスキルなぞ受けたら絶対体力が吹き飛ぶ。否、それがただ何の変哲も無い一閃だとしてもこのダークエルフの筋力値^Sで繰り出されるなら全て致命傷だ。

「はあ……………はあ……………」

致命傷こそ無いものの身体には擦り傷を負った証として、赤いラインがいくつも負っている。

息も上がり、HPバーもギリギリ緑色を保っているという状況だ。たとえ擦り傷だとしても、あと一撃くらえばナナシのHPが半分を下回ったという事を示す黄色に変わ

る。そうなったら、あのティアルとか言うデカ乳女が自爆攻撃で俺を残して全滅。そして、俺は一人この霧が晴れることない森で一生彷徨い続けることとなる。……というか、その自爆攻撃の効果範囲ってどれくらいなんだろ？俺が生き残る以上そこまで広くはないはず……。だとしたら、かのニヤニヤ女とか生き残っちゃうんじゃない？え？それヤバくない？

「マジで何とかしないと……」

『どうだ？お前の言う、一回の勝利は引けそうか？』

ダークエルフ騎士は余裕の笑みで立っている。剣を構えてさえないない。

あー、腹立つ。完全に油断してるよ。つーか、この白髪ロン毛、さつきから一発まともに食らったらそれで俺が死ぬ事を分かっているのか、バカみたいにソードスキルを連発してきやがる。

「うるせえ……。まだ、結果が出てないのに勝利もクソもあるかー」

『確かにその通りだ。……では、今からその結果を出すとしよう』

ダークエルフの騎士がソードスキルの構えを取る。ソードスキルは、片手剣・突進斬りSS《ソニックリープ》。くしくも、そのソードスキルは最初に俺が殺されかけたスキルだ。

ソードスキルは確かに強力だ。攻撃の威力に補正がかかり、種類によつては、攻撃範

囲に補正、三次元的移動なんて物も可能とする。しかし……。しかし、それは――。

――どうしようもなく、「諸刃の剣」なのよね。

もう何処にも居ない彼女の声が聞こえたような気がした。

――

一体どれくらい前だろうか？ 《SAO》がサービスを開始して間もない頃だったから一月か二月くらい前だろう。

そんな時に、彼女はナナシに教えた。

「ソードスキルが諸刃の剣？」

――ええ。そうよ、め……。ナナシ。確かにソードスキルは強力よ。それに音も光も派手で使つてて気持ちが良いわね。少なくともこの世界でやっていくにはほぼ必須と言つて良いくらいには重要な物よ。でも、それは良い事だけじゃないの。メリットには当然、デメリットも存在する。ナナシ、貴方はソードスキルのデメリットつて何だと思ふ？

ややあつてからナナシは答える。

「……。んー。やっぱリススキル発動前後に生じる隙ででしょうか？あの時は必ず無防備になる」

――そう、正解よ。流石、ナナシ。お利口さんね。

そう言つて彼女は、爪先立ちになつて手を伸ばし、頭を撫でようとする。それに気付いて、ナナシは自分の腰を落とす。

「ー確かに、それは正解。でもそれは100点満点ではないわ。

「他にもあるのか。……教えて下さい、ユーナ先生」

「ーそうやって、素直に疑問を聞ける所は貴方の美点ね。……残りのデメリットはね。ソードスキル発動に必要な条件、つまり「構え」ね。……あと「先生」って呼ばれ方も新鮮で素敵。」

「『構え』……」

「ーソードスキルを発動するにはそのソードスキルに合わせた独特の構えが必要よね？それをゲームシステムが感知してソードスキルが発動する。つまり、ソードスキル一つ一つの発動前の構えは全部違う。つまり……。」

彼女は、そこで話を止め続きをナナシにさせようと促す。

「ーつまり、その「構え」を知っていたら、どのソードスキルがくるか分かる」

「ーそうよ。もつと噛み砕いて言えば、どの攻撃がどのタイミングでどの角度からどういう方向で振るわれるかが、全部分かつちやうって訳。……ここまで言えば、ソードスキルの危うさは分かるわね？」

「そこまで教えてしまったら、もう避けて下さいと言っているような物だな」

——それが、ソードスキルのデメリット。でも、やっぱり普通に武器を振って出せないダメージはとても魅力的。つまり——。

「……成る程、分かりました」

——分かってもらえて嬉しいわ。ソードスキルを連発するっていうのは某有名狩りゲーで、相手は寝ている訳でも倒れている訳でも罨に嵌っている訳でも怯んでいる訳でも無いのに溜め斬りや属性解放突きばかりで攻撃しているような物よ。だからこそ、重要になってくるのがタイミング。分かった？

—————
「分かってますよ、姉さん」

ナナシも構える。ただし、ソードスキルの構えではない。ただ、剣に両手を添えただけ。

——まだ、まだだ……。

白髪ロン毛は俺の姿勢が避ける物ではなくドツシリと正面からかち合う構えだと理解したのだろう。

『さーらばだ、人族！』

大きく叫び、ダークエルフのソードスキルが発動した。ダークエルフがナナシに向かって神速の速さで駆ける。

「お前がな」

そして、ナナシも前に出た。ダークエルフ程では無いが、ナナシも全速力でダークエルフとの距離を詰める。今日初めての前の踏み込みにダークエルフの騎士も一瞬驚いたようだが、それだけだ。絶死の一撃がナナシに迫る。

『……オオオオオオッ!!』

ナナシがダークエルフの《ソニックリープ》の射程に入る。瞬間、ダークエルフの剣が振るわれる。

そして、ナナシは——

「……………」

一歩引いた。ナナシは前方への踏み込みに急激な制動を行い、小さく後ろに跳んだのだ。

『……………なッ?!』

ダークエルフの一閃は、ナナシの服を裂くに留まった。そして、ダークエルフがソードスキル発動の反動で動きが止まる。

——ソードスキルで大切なものは、どれだけ確実に当てるか。そして、どれだけ確実に当てられる状況に持ち込むか。ならば、それは——

「……………だあああああああッッッ!!」

ここで初めてソードスキルの構えを取る。

片手剣・突進突きSS 《レイジ・スパイク》。ゲームシステムによる爆発的推進力を生む突き。それが、ほぼ零距离でダークエルフの心臓を穿つ。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ』

「アアアアアアアアアアアアアアアアッ」

二人の絶叫が森にこだまする。

!!!?!?!?!

「……………ラアアアアアアアッ!!!」

《レイジ・スパイク》の推進力が二人を引つ張り、遠く背後にあった巨木に激突する。

『……………ア……………ガ……………ッ』

ナナシの直剣《アニール・ブレード+2》がダークエルフの心臓を貫通し、巨木に食い込む。

「食い込みがたらねえ……………ナアッ!!」

『ゴボオッ?!』

体術・拳打SS 《閃打》^{センダ}。その一撃が《アニール・ブレード+2》の柄頭に炸裂し、まるで杭打ちのように深く巨木に食い込んだ。

「油断するからこうなる」

ナナシは疲れたと言わんばかりに両膝に手を置き、大きく息を吐く。

「100の結果から引かれる最初の一枚は……俺の『勝利』だったな」
ダークエルフの騎士にだけ聞こえる声で、ナナシは勝鬨を上げた。そして、

2024年3月13日 顔無しの髑髏は今日も今日と
てー

EP-nf① ソロプレイヤーナナシさん（仮）

俺たちがVRMMORPG《SAO》に囚われてから一年以上が過ぎた3月。

冬の寒さがなりを潜め、日中は温かい季候を取り戻し始めているが、まだ日が昇り始めたばかりの今は未だ肌寒く、冷気が男の肌を貫く。

その男ー線が細い華奢な出で立ちで、どこか正気の抜けた目をした少年は、腰にそこそこ強力な長剣を吊り下げ、ここから一番近い街に歩を進めていた。

「あー……寒。春先だつってもマジで寒い。もう《転移結晶》使っちゃうか？……いや、高価な命綱をこんなところで使っちゃうのはなあ……それに、寒いので我慢して歩いてきた努力が無駄になる……ああ、寒い。クソ寒い……」

意識的か無意識的か、そう独り言を呟きながらわざわざ日陰を選んで歩いていく。

ここは、月初めからボス攻略が停滞したアインクラッド第56層。その迷宮区から一番近い街への道程。

そして、彼の名はナナシ。アインクラッドクリアを目指す《攻略組》の一人だった。

+++++

「取り敢えず、ここからここまでのアイテムは全て売却。……回復ポーションが切れそうだな。じゃあ、ポーションと5日分の保存食を売ってくれ」

雑貨屋でアイテムストレージの中を確認しながら、売却物と購入物の確認をとる少年の姿がある。ナナシだ。

『まいどありい！』

と、店のNPCから小気味の良い声が店内に響く。日が昇り始めてから間もないこんな早い時間から商売を始めてくれるのは朝帰りが多い彼には有難い話だ。

「あ、おはよう、ナナ君。今からダンジョンへ出発？」

女の声がナナシの背中を叩く。若干、言葉の端々に上ずったような響きが残る声に、彼は溜息と共に振り返った。

「いいえ、違いますよシーナさん。迷宮区への行きではなく、その帰りです。」

振り返るとそこには、思った通りの女がいた。自分より1〜2歳程年上ーおそらく18歳の女性だ。着物が魔法使いのローブのようなゆつたりとした服の袖から、彼女の

肢体と比べてアンバランスな程大きな籠手を覗かせている。

彼の言葉は固い。彼はシーナと呼んだ彼女のことを嫌っているからだ。別に彼女が何かした訳でも、彼女が悪い訳でも無い。ただ、どうしても……受け入れられないのだ。それに初対面の時にも失敗した。これに関しては……いや、彼女との事は全てこちらに問題がある。彼女の声の上擦りは、彼の声から分かる煩わしさを感じ取っているからだろう。

彼女には悪いと思っている。それでも、こうやって何かと話しかけてくる彼女には申し訳なさで一杯だ。

それでも……受け入れられないのだ。何故ならー

「ちよつと、聞いてるの？私、ちよつとだけ怒ってるんだけど」

怒っているのか……。それは不味い。

「ええ、勿論聞いてますよ。で、何の話でしたっけ？」

聞いてませんでした、とは言わない。誰とは言わないが、こういうふてぶてしいところが似てきたなあ、と思う。誰とは言わないけども。

これには、彼女も呆れを隠さない。ついでに遠慮も無くなった。

「あのねえ……。私は貴方の事を心配してるの！どうせ、何時ものように保存食か武器の耐久値が無くなるまで迷宮区で野宿してたんですよ。そんな余裕の無い生活をして

たら本当にふとした時に死んじゃうよ」

何なんだろう、この女。嫌われている事は分かっているのだろうに、毎度こうして話しかけてくる。

「大丈夫ですよ。俺はこの生活をもう一年以上続けているんですから。……それでは俺は行きます。」

こういう時は、とつとと撤退だ。昼まで寝た後にやる事はまだあるのだから。

だが、彼女はそこで問屋を下ろさないようだ。

「あー、もうっ！待ちなさい！これから私、朝食だから付き合いなさいっ！奢ってあげるから」

「いや、良いですよ別に。俺、これから寝るんで」

勘弁してくれ、と言いたいが彼女にその意思は伝わらないようだ。

「嘘ね。どうせ、この後またすぐに迷宮区に潜るつもりなんでしょう。いいから、付き合いなさい」

いや、寝るつもりなんですけどお?!と言っても信じてはくれまい……。なんせ、自分は《攻略組》の中でも結構危ないレベルでストイックに攻略している人間と認知されているからだ。別にそんな事ないのに……。安全圏外で数日間野宿するのは？普通、普通。少なくとも俺の中では当たり前だ。

「出発前にポーシヨンの買いに来ただけど、今日はキャンセルね。……まったく。ゴドウさんたちとの迷宮区攻略の予定があっただけど、お断り入れなきや」

……ゴドウ。

ーいや、そんなことよりもだ。

「どうやら、彼女は俺のために完全に一日開けるつもりのようなのだ。これは彼女に感謝の言葉を述べなければならぬようだ。マジで何なの、この女?! 余計な事しやがって有難うございますだ、クソツタレツ！」

「い、いやいやー! いいですって、シーナさんにも予定があるんでしよう? そちらを優先しませー」

「はい、送信。これで、今日はフリーね。……何か言ったかしら?」

「………いいえ、何でもありませんよ。」

「いつの間にか、彼女はフレンドかギルドのメッセージ機能で「今日は攻略休みます」という旨のメールを送ってしまっていたようだ。」

時々見せる彼女のこの強引なところには、お手上げだ。

「……分かりましたよ。食事でも何でも付き合いますから、今度からもう少し相手の事情を聞いてからにして下さいね」

「そう脱力気味に言っつて、俺はシーナさんに白旗を上げた。」

ふと、背後で雑貨屋のNPC店主が笑いを噛み殺しているのを見て、殺意が湧いてきた。二度とこの店は利用するものか。

+++++

「どうしたんですかい？ゴドウの旦那」

「……………いや、あの娘が今日の攻略を所用で休むそうだ」

「……………へえ。じゃあ、多分ナナシ君の所ですかねえ。シーナ嬢は、最近随分とご執心のようですからねえ」

「……………」

「おっと、どうしたんですかい、お、と、う、さ、ん？」

「……………私は、あの娘の父親ではない」

「誰も、お嬢の父親が貴方とは言ってませんぜ」

「……………」

「クツクツクツ、冗談ですぜ、旦那あ」

何処かで、男の噛み殺した笑いが響いた。

EP | nf ② ANOTHER RED (仮)

「……驚いた」

半端、無理矢理連行されて食事処の席についた俺の第一声はそれだった。

「何よ、唐突に……」

対面の席に座るシーナさんも少々困惑気味だ。

そりや、席についていきなり「驚いた」などと言われたら困惑するだろう。

「いえ、シーナさんって『怪人ビックハンドグランマ』では無かったのですね」

我ながら滅茶苦茶失礼である。

「何よ、唐突にツ?!」

お怒りのシーナさん。さっきと同じ事を言っているがそこに孕んだ怒気が違う。

すみません、わざとです。貴方に嫌われたくて、わざと火に油を注ぎました。それでも、根も葉もない悪口というわけではない。

「シーナさんっていつも籠手が大きいじゃないですか。だから、手もきつと大きいんだろ。うなあ、とずっと思ってたんですよね」

シーナさんの扱う武器は、片刃の両手剣《ラージ・ジョー》。モンスタードロップで得

られる武器の中でも最高級。数多のプレイヤー鍛冶士が羨み妬み、目標とするオーバーツ。所謂《魔剣》クラスの武器の一つだ。その《ラージ・ジョー》は、名前に『L a r g e』^大が付くに相応しい巨体だ。彼女の身長は、目測で165cm程度。女性の平均身長よりも高い。そして、《ラージ・ジョー》の全長は、その彼女の身長約1.5倍はあるのだ。当然、一撃の重さも異常の一言。威力重視の両手斧プレイヤーも裸足で逃げ出すこと必至だ。バケモノである。武器も、それを軽々と振り回す彼女も。

閑話休題。

そんなドデカイ武器は当然柄も長く太い。普通の手では掴んで持ち上げることさえ難しいだろう。だから、彼女の腕はちよつとアンバランスな程デカかった。いつも、籠手を装備しており、その籠手ごしからしか見たことは無かったが、それでも異常なレベルで大きいのだ。時々、その大きな腕のせいでフラフラと揺れている彼女を見て『ヤジロベエ』を連想したことは一度や二度ではない。

だったのだが、

「あのデツカい腕は籠手だったんですね」

「当然じゃない?!」

流石に料理を食べる時は外す。籠手をアイテムストレージにしまい、剥き出しになった彼女の手は……あら不思議。普通の人間サイズの手だ。寧ろ、いつもの着物やローブ

のような広く大きい袖のせいで隠れて見えない。

「何ツ？ ナナ君、貴方……まさか、私の腕あの籠手と同サイズだと思ってたの?!」
「てつきり」

テヘペロリンコ（尚、死んだ魚の目）。

「そんな訳無いじゃないツ。そんなバケモノ居てたまるかツ！ 貴方の目って昔から死んだ魚みたいな目をしてるけど、本当に死んでるんじゃないの!!」

酷い言われようである。俺の目が死んでるのは事実だけど、人には言っただけじゃない事があるのではないだろうか？ とは、対面に座る女性に「怪人」「ビックハンド」「グラ
ンマ」と言っただけのけた男の言葉である。

「……………ていうか、『ビックハンド』はともかく『怪人』って何ツ?! 『グランマ』って何?! 私をババアって罵りたいの?!」

……………山姥やまんば的な？

しかしここはナナシ、「人には言っただけじゃない事がある」ことを学んだ彼が華麗に黙殺する。

「そうなるよ、逆にシーナさんの籠手がどうなってるか気になりますね。あの籠手、絶対指が籠手の指先に入っていないでしょう」

「無視?! 無視するってどういうの?!」

その通りです。

「一度、籠手の中身見せてくれませんか？俄然、興味が湧いてきました」

「……見せる訳ないでしょ。バーカ、バーカ。あとバーカ」

おっと、シーナさん。叫び疲れたのか静かになったが、逆に拗ねてしまわれた。

まあ、強引にドナドナした仕返しには丁度良いだろう。

「あ、店員さん。この一番上のセットメニューのヤツお願いします。シーナさんは、どれにしますか？」

「……貴方って、ホントマイペースよね。いいわよ、もう。……すみません、私も彼と同じのお願いします」

恨めし気に睨んでくるシーナさん。それも数秒の事。さっきまでの事をスツパリと切り替えて注文していく。

「店員さん、やっぱ一個下のヤツでー」

「何だよッ!？」

別に、シーナさんと同じヤツが嫌だったとかそういうのじゃないよ？ホントだよ？

+++++

「それにしても意外だったわ」

「何ですか？唐突ですね」

先程、いきなりの「驚いた」発言への仕返しだろうか？

「7日前の事よ。この層のフィールドボス討伐会議の時に、貴方あの《黒の剣士》君に食つてかからなかったでしょ」

「……………俺、あの人に喧嘩売った事ありましたっけ？」

「……………何で、貴方が知らないのよ。私を知る限りではそんな事ないけども……………でも、彼の発言は、一秒でも早くこのデスゲームから解放されたい人たちにとっては到底受け入れられない物じゃなかったかしら？」

「……………」

俺は、ゆつくりと記憶を探り、思い出す。その日の事を。たった一週間前の事だ、忘れる筈がない。寧ろ、こうやって思い出そうと努力する必要だつてない筈である。なら、何故時間をかけるのか……………。

簡単だ。ほとんど聞いてなかった。それに尽きる。

+++++

7日前。3月6日のボス討伐会議。それは、《血盟騎士団》副団長の《閃光》アスナによる前代未聞の提案から始まった。

曰く、この層のフィールドボスを倒すのは中々に困難だ。

曰く、事実、我々《攻略組》は長期間このフィールドボスに足止めをくらっている。

曰く、フィールドボスをパニの町に引つ張つていき、フィールドボスがNPCを襲っている間に討伐してしまおう。

というものだった(筈だ……あんまり覚えてないけど)。

そこに食つてかかったのが、件の《黒の剣士》様である。

曰く、NPCたちは生きている

曰く、《閃光》様のやり方には従えない

というものだった(………気がしないこともない)

+++++

なんとなく、フワツとした記憶だが思い出した(多分)。

しかし、これは……

「……シーナさんは俺のことをかんじがいをしている。俺は別に攻略が多少遅れる程度

の事は気にしない。……というか、攻略自体そこまで急いでいる訳ではありませんよ」

「……………寧ろ、とつとと攻略されたら困る。」

「……へえ、そうなの。フィールドボスをやつとこさで倒したー、つて喜んでる私たちを尻目に一人迷宮区に向かって行つたつきり今日まで街に帰つてこなかった人が？」

た、確かにい!?

「こ、これは否定できない……だどッ」

「実際の所どうなの？何割くらい攻略したの？お姉さんに教えてみなさいな」

「……………もう、攻略自体は済んでる。隠し部屋がある事も考慮しめマツピングは9割五分。……当然、ボス部屋も見つけた。今は、《狩場》を探している所……かな？」

「……………」

深妙な顔になるシーナさん。

「ねえ……………本当に大丈夫？身体壊したりしてない？」

「……………別に、大丈夫ですよ。体がどうにかなる前には帰ってきてますから」

う、嘘はついていませんよ。実際、こうやって五体満足で帰ってきていますし。

「……………」

俺は、シーナさんの疑り深い視線を煩わしそうに顔を晒す。

「……ま、良いわ。信じてあげる」

俺の真意を見抜くのを諦めたのか、彼女はカラツとした笑顔を作っている。

「それでも、気を付けなさいよ。最近は、何かと物騒なんだから」

物騒……？

「あの噂の殺人ギルドの事ですか？ 確か、大晦日に小規模のギルドの皆殺しにしたって
いう。」

殺人ギルド《ラフィン・コフィン》。通称、《ラフコフ》。SAOサービス開始初期から攻略の妨害
などの暗躍を行なっており、存在が噂されていた殺人集団。去年の大晦日、2023年
12月31日に1つのギルドを皆殺しにし、翌日の2024年1月1日に存在が公表さ
れた集団だ。

「……大丈夫ですよ。少なくともシーナさんが気にする必要はありませんよ。アレは自
分より弱い者を殺して悦に浸るゴミクズ共の集団でしょう。」

「ナナ君……？」

急に人の名前を呼んでどうしたんだろうか？

「少なくとも、プレイヤーの中で最も高いレベルの俺たちには手を出してきやしませ
ん、って話ですよ」

あまり、気分の良い話でも無い。とつとつこの話は終わらせようか。

「そう……そうなんだけどね……」

「………まだ何か？」

「ナナ君知らない？ 実は、噂でもう1つ危なそうな集団があるそうなのよ……」

「………もう1つ………ですか？」

流石に、それは知らないな……。

「ナナ君はさー」

彼女は言う。もう1つの殺人を旨とするであろう狂気の集団の名を。

「ー」
《無^{No}貌^{Face}》
って知ってる？

『お客様、お待たせしました』

NPCの店員が注文したメニューを届ける声をどこか遠くで聞こえた。

EP-nf③ 《無貌 (No Face)》

レストラン内の1つのテーブルで注文した食事に舌鼓を打ちながら少し困惑の混じる声が響く。

「無貌^{No Face}？」

単語を口の中で転がしながら記憶を漁ってみる。

……聞いたこと……聞いたことがない。それは初耳の単語だ。

「厳密には、その連中の頭目らしき男の通称だそうよ」

「へえ……」

……聞いたことないな。

「その頭目の男は、黒づくめ出で立ちで顔はかぶり物の影で完全に中が覗けないそうよ。

……ようは顔無しよ、^{アーケレイズ}上位幽霊みたいなの」

「ふむふむ」

「その男の仲間たちは、顔を白の仮面で隠した黒づくめでー」

「ふむふむ……ん？」

「『ん？』って何よ、『ん？』って。やっぱり聞いたことあった？」

「いや……うーん……やっぱり……ないですかね？」

最後の情報だけなら心当たりがあつたのだが、顔無しのリーダーとなると考えてたヤツでは無いか……。

「なんで私に聞くのよ……。少なくとも噂だけなら『攻略組』全員が知ってるわよ」

『攻略組』が全員？

「俺は知りませんでしたよ」

「……………貴方以外、ね」

ふむ、この手の情報を俺が知らないとは……情報収集を怠りすぎたかな？しかしー「しかし、よりにもよって、どうして『攻略組』が」なんですか？寧ろ、その手の情報は下層の人たちの方が重要度が高いと思うのですが……」

先程も言った気がするが、犯罪を犯すプレイヤーは確実性を重んじる。ーつまり、自分たちより弱い奴を、自分たちより少ない連中を狙うのだ。確かに、今年の1月の『ラフコフ』の台頭に呼応するように現れたらしい『無^{No}貌^{Fa}』は全プレイヤーにとって無視しえない存在だろうが……

「もう……察しが悪いわね……。つまり、その『無貌』の連中は、私たち『攻略組』の脅威になりかねないからよ」

「……………うん？えっと……つまり、もう被害が出ていると？」

「そうだとしたら、確かに不味いな。」

「いいえ、出てないわ」

「……………出てない？」

「厳密には、『今はまだ』と『攻略組』には』って但し書が入るのだけど」

「……………と言いますと？」

「なんと言うのかしら……………えっと、『攻略組落ち』？って呼ばれてる人たちの中に何人が被害が出ているそうなのよ」

『攻略組落ち』。読んで字のごとく、実力面か精神面かで『攻略組』に着いていけなくなつた連中の事を指す。

なるほど、落ち目とは言え『攻略組』と同程度の実力者が殺されたとなると、そりや戦々恐々だ。

「調べてみたら、結構昔からあつたみたいなの。勿論、全員って訳じゃないわよ。寧ろ、そつちの方が少ない」

「偶然の可能性は？」

「無いとは言わないけど……………腐つても以前まで第一線で戦っていた人たちよ。それが、下層に降りて間もない時期に死ぬ。それもそれなりの数が……………確かに『攻略組落ち』の総数から見た死者の数は少しよ。……………だけど、おかしなタイミングで死んだ……………不審死

の件数と考えたら決して無視できない物だわ」

被害がどれだけかは分からないし、数を教えられてもピンとこないだろうが、最前線のギルドをほぼ単独で切り盛りしているやり手の彼女がいうのなら間違いないだろう。

「成る程……。早い内に叩いておかないと、調子にのったその《無貌》^{No Face}の連中が《攻略組》にまで手を出してくるかもって訳か」

「ま、そういうことよ。最近は、《血盟騎士団》や《聖竜連合》の人たちが少なくない人数を登用して調査に当たってるわ。……一応、私たち《m e m e n t o m o r i》も最近はそのちがメインになってるわね」

「へえ、メモモリってそこまで人数に余裕があつたんですね」

「いえ、無いわよ。……でも、ゴドウさんが気になってるそうなのよねえ……」

「……………へえ」

「昔からゴドウさんってそういうところあるのよ。普段は何も言わずに私たちに合わせてくれる、協調性の塊みたいな人なんだけど……。放っておいたら、一人で行っちゃいそうだし。あまりそういう事に割く人的余裕は無いんだけど、サブマスとしてはギルマスの補佐もしたー」

「では、今日もその《無貌》^{No Face}の調査に向かうところだったんですか？」

「ーえ？ いいえ、今日は違うわ。あまり《無貌》の件に気をかけすぎると、

《memo^っmento mori^チ》の攻略に差し障るからって、私がゴドウさんをお願いして調査の切り上げさせたの。……それも、誰かさんのせいで私だけオジャンなんだけど……」

そう言いながら、シーナさんはこちらを見る。それ、俺のせいですか？絶対違いますよね？冤罪ですよ、それ。

「……ま、いいわ。それで、今日は何をするの？貴方の為に一日あけたんだから、付き合おうわよ」

………。ホント何なのこの人お……。

「………。そうですねえ」

マジでどうしよう……。本来の予定は、このまま宿で仮眠とってから、迷宮区のマッププデータを情報屋に売ってからまた迷宮区に潜る筈だったのだが……。

「あ、じゃあ《無^{No}貌^{Face}》の調査っての気になりますね。俺も調査してみましようかね」
個人的にその連中の事気になるし。

「えー……」

まあ、先日までその調査していたシーナさんは乗り気ではないだろう。

「別に着いてこなくてもいいですよ。俺、一人で行くんで。………。それはそうと、ご馳走さまです」

「え、もう食べちゃったの!? ちよつ、ちよつと待って、私もすぐ食べ終えるから! ……つて、私全然食べてない!？」

「いえ、ゆっくり食べていていいですよ。シーナさんにとっては、ずっとやってた《無^{No Face}貌》調査の繰り返しになるでしょうし」

ですから、ギルドメンバーと迷宮攻略に戻ってもらって結構ですよ。

「あ、ちよ!? 待ちなさいッ!」

「やっぱりシーナさんに借り作るのアレなんでお金だけ渡しときますね! ……じゃ、ご馳走様でした!」

それだけ言っただけでナナシは、

『お客様、店内では……』

店員NPCの注意を置き去りにしてレストランから走って消えていった。

呆気にとられたシーナは、ナナシに逃げられた事に思い至り怒りの声を上げる。

「……………もうっ! 何なのよお!!」

彼女の視界には、ナナシからシーナ宛にレストランで消費した料金^{コスト}が振り込まれた事を示すメッセージのウィンドウが写っていた。

EP-n f ④ 本日の迷宮区。モンスター時々地震。つまり平和だ（錯乱）

アインクラッド第56層迷宮区。

「ツツシャオラアア!!!」

という女の子にはあまりして欲しくない雄叫びと共にアインクラッド最前線である迷宮区にて、今日何度目かの激震が走った。

その原因がある迷宮区の一角でモンスターが断末魔の悲鳴をあげることさえ許されず絶命した。いや、もしかしたら悲鳴を上げていたかもしれない。だが、そうだとしてみシーナの圧倒的な怪力STRによって振り下ろされた圧倒的質量を持つ両手剣《ラージ・ジョー》が地面に炸裂する大音響によって掻き消されて誰にも届かない

彼女と行動を共にするパーティメンバー達は怒れる獅子……いや、鮫に顔を青くさせていた。

しかし、そのパーティメンバーにも2人程例外がいた。

「……………随分と怒っているな。珍しい」

「タハー……こりゃ、アネサン随分とおかんむりじゃねーですかい」

一人は寡黙で口数の少ない男。ギルド《memento mori》のギルドマスターであるゴドウ。

もう一人は、随分と軽薄で年下のシーナをアネサンと呼ぶ男。同じくギルド《memento mori》の最古参メンバーであるフラットだ。

「……………あの娘は今日の迷宮区攻略を休むと言ってなかったか？」

「言ってやしたねえ…………」

心配気なゴドウに対し、何故かしみじみと答えるフラット。彼女は、自分が提案した迷宮区攻略に今日になって急に休みたいとメッセージを送ってきたのだ。だということに、蓋を開けてみれば不機嫌さを一切隠しもしないで攻略メンバーの集合場所にいたのだ。そして、迷宮区に入っつとあつとあの調子だ。

「……………やはり休ませた方がー」

彼女の事を実の娘のように可愛がっているゴドウとしては彼女の異常に気が気でないようだ。

「いやいや、アレはアレで良いんですよ。ストレスは発散出来る時に発散させとかなないと。…………寧ろ、溜め込まれた場合、後が怖い」

それに対し、フラットはどこまでも自然体だ。

「……………ストレス？」

少々、ゴドウは言うべき内容が足りていないが、付き合いの長いフラットは彼が言いたい事を全て理解している。

「あー……。多分違うんじゃないですかね？ギルドのサブマスターとしての役割にストレス、とかじゃあねーでしょう。恐らく……いや、十中八九アネサンが最近ご執心のナシのアンチャン絡みでしょうね」

おそらく、シーナ嬢はあの少年と今朝出会って彼の為に時間を作つたが、案の定逃げられたのだろう。もうそういう場面を何度も目撃している。

フラットから見て、あの少年は何というか色々とおかしい。このSAOという世界でタガが外れた人間というのは一定数いるが、アレは中でも極め付けの部類だ。言つてしまえば社会不適合者。それが無理矢理社会に溶け込んでいるような違和感を覚える。それが悪いとは言わないが、どこことなく危なっかしい姿が他とは浮いて見える。

そんな彼を、実は根っからの世話焼きでお姉さん気質のシーナ嬢が執心するのは目に見えていた。特に《m e m e n t o m o r i》のメンバーで彼女は最年少。サブマスターを担っているが、メンバー全員から可愛がられる存在だ。悪い言い方をすればあの少年はそんなシーナ嬢の世話を焼く相手として格好の的だったのだ。

しかし、ソレをある意味一人で完結しているあの少年は受け入れないだろう。受け入れていたら色々と楽だったが、実際、半ば拒絶されている。それに対して……まあ、こ

のようにストレスを溜めて現在発散中という所だ。あの少年にとってはいい迷惑だろうが、もうちよつとオブラートな対応をお願いしたい。

「……………ぬう？」

そういう年頃の乙女心とは無縁だったであろう我らがギルドマスターは、やはりよく分かつていないようだった。

それにフラットは苦笑する。

「ま、その辺は出来る限り俺がフォローしますよ。……………それはそうとあのアネサンの背後とっているモンスター拙くないですかね？」

シーナ嬢は目の前のモンスターの集団を一匹づつ……………いや、時々二匹まとめて叩き潰していて背後の一体には気付いていないようだ。

「……………問題無いだろう」

だが、ゴドウはそれに対して何の危機感も覚えていない様子。

「え？でもですよ？……………って、マズ！アネサンっ！背後のモンス……………た……………を握り潰しちゃいましたね……………」

シーナ嬢は、背後からジリジリと近付いていたモンスターに気付いていたのか、手の届く範囲にまで近付いてきた瞬間その顔を左の巨腕でひっ掴み、片手で背負い投げをするように地面に叩きつけた。そして、一拍遅れてグシャと頭が潰される音を捉えた。

……捉えてしまったというべきか。

「フラットさん、何か言いました？」

フラットに話しかけるシーナはさっきまでの鬼神の如き大立ち回りが嘘のように普段通りに話かけてくる。

それにフラットは、何故か背筋が冷えた。

「い、いや。何でもないっすよーアネサン」

幸いと言うべきか、言葉に震えが乗らなかつた。

「……ふむ、シーナは仕方ないにしてもこれでは他のメンバーの為にはならんな」

「ゴドウの旦那？」

「……二手に別れる。私とシーナ、お前と他3人だ。其方の先導は任せる」

「……………へい」

それだけ言って、ゴドウはシーナの下に歩いていく。

「シーナ！余所見をするな！まだ、モンスターは残っているぞ!!」

「は、はい！すいません！」

「今日は二手に別れる！シーナと私！フラットとガゼルとキリハとサルヒコだ！いいな!!」

「[[[は、は、は、は]]」

ゴドウの堂に入った指示に、他のメンバーは顔を青くしたまま、若干でも気分の持ち直したシーナはゴドウと二人つきりだという事にどこか嬉しそうにしながら了解の意を示す。

そんな5人を少し離れた所から見ながらフラットは呟く。

「……………いやホント、大物だなあ」

あの戦闘に全く動じないゴドウもだが、シーナ嬢から逃げて平気で怒らせるナナシにもだ。

「フラット！聞いているか！」

「へーい、聞いてますよー」

今日も最前線は程よく命の危機を隣に平和に過ぎていった。